

1992年に始まった「フォーラム高山」は、今回でちょうど10回目の開催ということになる。第10回という一つの小さな節目にあたり、今回は多少これまでの「フォーラム高山」についての俯瞰的な回顧を含めつつ報告を行いたい。

今回の「フォーラム高山」も例年のように「DAAD 友の会」の主催、「日本ドイツ学会」および「東日本アレクサンダー・フォン・フンボルト協会」の援助により開催された。しかし、この報告の標題には従来通り「フォーラム高山」と掲げているのだが、実は今回は運営上の事情により、この「フォーラム」は、これまでほぼ例年開催されてきた高山ではなく、軽井沢にある上智軽井沢セミナーハウスにおいて3月29日から31日の3日間にわたって行われた。軽井沢で行われたにもかかわらず「高山」の名を冠しているのは、この「フォーラム」がこれまでほぼ高山で行われてきたこの催しの基本的な性格を引き継いだものであり、「フォーラム高山」がいわば固有名詞となっているという理解に基づいているためである。(1997年に京都で開催された際にもやはり「フォーラム高山」の名称が用いられていた。)「フォーラム高山」という名称は、第1回の開催の際に定められた「日独学生フォーラム高山」の通称であり、「日独学生フォーラム」という正式名称も例えば参加者への案内の文書などに今でも用いられているのだが、「フォーラム高山」のほうが関係者のあいだにむしろ定着してしまった観がある。今回の軽井沢での開催にあたり、運営スタッフのあいだで開催地を含めた今後の運営の展望について話し合いを行い、開催地をこれまでのように高山に限らない可能性が高くなったため、今後は本来の「日独学生フォーラム」という名称を用いることになる予定である。今回はまた、DAAD 東京事務所所長のUlrich Lins氏にも参加していただいたという意味でもきわめて意義深いものだった。

「日独学生フォーラム高山」第1回開催の際の企画書を見ると、その基本的コンセプトが現在にいたるまで基本的に引き継がれていることがわかる。日本に滞在するドイツ人留学生(DAAD、フンボルト、文部省などの奨学生)およびその年の秋からDAAD奨学金によりドイツに留学する(あるいは留学を終えた)日本人を対象として、あるテーマのもとに「日独両国語による講演と討論を通じての学術交流」を行うことが何よりもその骨格をなしている。講演は日本人とドイツ人講師が各1名ずつ行い(そのための資料を事前に参加者に配布する)、グループ討論、全体討論を行うという形式、また講演も含めて日本人はドイツ語を、ドイツ人は日本語を用いるという原則も現在にいたるまで受け継がれている。この言葉に関する「ルール」は、とりわけ日独双方の留学生にとって留学地での議論の「練習」という意味合いが強く込められているが、そういった基本的枠組みは、さまざまな学問領域にわたる参加者が、多くの場合自分自身の専門に関わらないテーマに基づいて論議するということとともに、深められた学問的討論へとなかなか展開していかないという制約をしばしばともなうことになる。しかし、むしろ自分自身の専門とは異なるテーマの講演を聞き、討論を行うことによって、他の領域に対する広い視野をもつ機会を得、さらには新たな視点から自分の専門領域を捉え直すという一定の役割をこのフォーラムが果たしているものと期待している。

今回のフォーラムでは、Lesbarkeit der Stadt. Die Metropole als Lebens- und Kulturraum.

「都市を読む——生活・文化空間としての都会」をテーマとして、Franz Hintereder-Emde 氏 (山口大学)による「語られた都市・語り続ける都市」(»Erzählte Stadt, erzählende Stadt«)、およびこの報告の筆者、山口裕之 (大阪市立大学) による »Allegorischer Blick auf die Stadt« (「都市へのアレゴリーのまなざし」) の二つの講演がプログラムのうちに組み込まれていた。ドイツ人 11 人、日本人 9 人 (その他、運営スタッフおよび DAAD 関係者 9 人) のうち、6 人のドイツ人参加者はたまたま建築・景観設計を専攻する学生だったが、「都市」というテーマに対して今回のように文学・思想の側面から取り組むということは、彼らにとってかえって新鮮なものであったようだということを、フォーラムの最後に実施したアンケートからうかがい知ることができた。Hintereder-Emde 氏の講演では、ハイネ、クライスト、エンゲルスから、夏目漱石、ヴァルザー、デブリーン、ノルダウ、さらには村上春樹にいたるまできわめて多様な作品にふれつつ、「石でできた書物」としての都市というテキストを読む試みが、都市を扱う一連の文学テキストの上にもどのように重層化されているかが示された。その重層性とはつまり、都市として語られるものの表面的レベルの下に、いわばパリンプセストの上に何度も書き直されたテキストとしての都市のイメージが重なったものといえる。こういった表面といわば地下的な層という都市のイメージの二重性は、もう一つの本稿の筆者による講演のテーマにもつながるものといえるかもしれない。こちらの講演では、ベンヤミンが都市の中のさまざまな事物を、意味の二重性、一つの空間像における時間的二重性をもつ断片、しかもそれ自体として「像・画像」の特質をもつ断片として捉え、それらの断片によるモザイク像のうちに表面的な像とは異なるレベルで新たな連関を提示するまなざしが主に取り上げられた。こういったいわば画像的な思考のあり方は、ベンヤミンにとって概念的分節化による学問的方法に対置されるものであり、その意味で単なる都市に関する言説を越えて、メディア論的な視点からの対象把握の方法論にむしろアクセントが置かれるものであった。この講演をもとにした原稿はこの報告に引き続き掲載されている。また Hintereder-Emde 氏の原稿は、次号で掲載される予定である。また予定されていた講演の他にも、参加者の手島英貴氏 (インド学) がヨーロッパ的な都市の概念に対置される日本の都市について、京都を例に取りながら発表を行った。

各回のテーマに基づいた講演やディスカッションと並んで、フォーラム高山のもうひとつの重要な目的は、日独の奨学生 (あるいはかつての奨学生) に交流の機会を提供することにある。今回も例年のように一日の公式的なプログラムが終了した後、参加者やスタッフ、講演者が活発に語り合うことができた。ここで生まれた関係はこの場限りのものではなく、メールを通じて引き続き情報交換の母胎となることになるだろう。次のサイトでは、今回のフォーラム高山だけでなく、これまでの活動を概観することができるので、ご関心をお持ちの方はそちらもご覧いただければ幸いである。

Forum Takayama Web Site:

http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/~yamaguci/ft/ft_top.html